
タイムカプセル

ヨシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムカプセル

【Nコード】

N7086A

【作者名】

ヨシ

【あらすじ】

少しクールで、人付き合いの苦手な翔は図書館通いが夏休みの日課。図書館で恵美と出会う。恋愛をしたことがない翔は恵美を異性としてみはじめる。夏休み期間にふたりは仲良くなり、翔は恵美に恋におちる。付き合い始めて、いろんな経験をして、翔は序所に変わっていく。しかしそんな翔と恵美に亀裂が生じる。恵美のアメリカへの転校。恵美はその後アメリカで結婚したと翔は知る。その後翔は恵美の親友さおりと付き合い始めるが、かつての恋人恵美と生めたタイムカプセルを思い出し、中を開ける。すると一枚の手紙が・

•
•
•
•

（前書き）

高校2年のボクシング部所属の小説ですww

初めて小説を書きました。文章の表現、文字の使い方、などが少々おかしいところもありますが、

高校の同級生に読ませたところ評判が良かったので、載せました。

文の構成より、僕の才能、将来性を見てください。
これから小説を書いていきます。

クール

熱い。何て暑さだ。

30度を超す真夏の午後2時。

一人で図書館へ向う翔。普通、高校2年の真夏の昼なんていったら、一年で一番遊び盛りの季節だろう。

一人でとぼとぼと図書館へ向う。アスファルトから蒸気がこみ上げてるのがわかる。

熱さで図書館までの道のりが長く感じた。

翔はあまり友達らしき友達はいなかった。というよりも一人の方が楽なんだろう。

学校の昼放課は、いつも一人で昼食を済ませ、趣味は読書、消して明るいい性格ではなかった。

人付き合いなんて、生活に支障がきたさない程度で付き合っていけばいいと思っている。

嫌われたくはないが、別に好かれないとも思わない。そう考えていた。

落ち葉

図書館に着き、翔は小説コーナーによった。かなりの本数が並んでいる。

翔は一冊の本を取り、席について読み始めた。

「落ち葉」という題名の本。内容は男と女の恋愛小説。彼女が病気で早くに亡くなり、

男も後に続いて死のうとするが、そこで男はある女に出会い、自殺を止められる。

女と付き合い始めて、命の大切さを知る男。しかし新たに会った女も亡くなってしまう。

男は途方に迷いながらも生きていこうと決意する。

恋愛小説なんて読んだこともなかったが、たまたま取った本が恋愛小説で、性に合わない

と思いながらも読んでしまった。気づいたらもう5時を回っていた。

読書感想文

続きが気になり、借りる事にした。

カウンターの人に本を出した。

その時だった。横にいた女性が声をかけてきた。

「あのー。すみません。この本。」

翔は驚いた拍子で少し焦り顔で応答した。

「え？」

「この本、どうしても読みたいんです。読書感想文に書きたいんですけど、もう日にちがなくて。」

すみませんが、先貸してくれませんか？」

そいえば、読書感想文なんて夏休みの宿題にあったな。すっかり忘れてた。

べつに恋愛小説なんて性に合わないし、別に特別読みたいって訳でもない。

いいだろうと思った。

「いいですよ。どうぞ。」

「ありがとうございます。あのもし良かったら電話番号とお名前を。」

紙とボールペンを渡された。

「いいですよ。そんなの。気にしないでください。特別読みたかったわけでもなかったんで。」

「こっちの気がすみませんよ。それにさっきまでこの本読んでたの

を見かけたんで、

読み途中ですよね。読み終わったら連絡しますんで教えてください。

「めんどくさいな。別にいいのに。でもまあ断る理由もないな。翔は紙に名前と電話番号を書いた。」

「読み終わったら必ず連絡しますので。」

「別に急いでないので、気にしないでください。」

そういうと翔は愛尺をして図書館を出た。もう空がオレンジがかっていた。

携帯

8月に入り暑さも増して、セミの鳴き声も響きわたる。

翔は学校の出向日に出かけた。

宿題を昨日の内に片づけ、提出物の焦りもなく普通に登校した。

教室に入り、クラスのほとんどは日焼けをしていた。

休み期間の思い出話をよく耳にする。翔はほとんど休み期間中の思い出はなかった。

あえていうなら近場の親戚の家に行つたぐらいだ。

こんな普段の日常生活の延長みたいな夏休みなんか対して嬉しくもなんともなかった。

教師の雑談、宿題提出、指導が終わり、友達と話とかをする素振りすら見せないで、すぐさま翔は学校を出た。

照りつける太陽の中のんびり歩いて帰宅してたら、翔の携帯が鳴った。

約束

少し驚いたが、すぐさま電話に出た。

「もしもし」

「あのーこの前図書館で本を借りました白百合恵美ともうします。」
図書館…。少し考え込み、思い出した。1週間ほど前に図書館で本を譲った事を思い出した。まったく忘れていた。

「ああ、あの時の」「あの、借りた本を読み終えて、宿題も提出したんで、本を返したいんですけど今から会えませんか？」

「今からですか？時間は空いてますが、対して読みたい本でも無かったんで別にお構いなく」

「でも読み途中でしたよね。」

「別に俺は恋愛小説とかは性に合わないですよ。たまたま選んでしまっただけです」

「そうなんですか…。でも一度読んでみてもいいと思いますよ。いい本ですよ。これ。すぐ持ってきますんで。」

「そうですか。わかりました。」

「じゃあどこかに待ち合わせしましょう。場所は…。」

恵美って女と今から会うことになった

初めて

翔は恵美の言われた西岡公園に言った。学校の通学路の途中だったのですぐについた。

公園に入って、すぐ1人の女性が目に付いた。同じ学校の制服だ。

翔は女性の左側のベンチに座って恵美を待つことにした。すると隣の女性が声を掛けてきた。

「桐原翔さんですか？」

「え、あ、はい」

翔は驚いた…。突然だったので少し対応に躊躇した。

「あの、本ありがとうございました」

「いえ全然。そのまま返してくれて良かったですね」翔は言った。

「でも何か悪いかなって思っちゃって。それにその本凄く泣けまし

たよ」

「では今日からでも読んでみます。」

「読んでみてください。では本ありがとうございました。さよなら」
そついうと恵美は本とほのかに香るコロンの匂いを残して消えていった。

恵美は翔の中で少しだけ心に残る存在となっていた。初めて女性を異性として意識した。

接近

翔は今まで生きてきて恋愛をしたことがなかった。
女子から何度も告白はされたが、ピンとこないし、
第一、付き合うとかあまりよくわからなかったから告白を受けるた
びに振っていた。

しかし、翔はただ、本を貸してそれを機会にほんの少し喋っただけ
の恵美にかすかに興味を持っていた。

もつと恵美を知りたいと思った。

これが恋なのかはわからない。

しかし恵美は気持ち綺麗な子なんだと翔は会った時に感じた。

翔はそれから幾度も図書館に足を運んで恵美を目で探した。

しかしいいない。あの時いたのはたまたまだったのか、少しがっかり
した気持ちになって本を読んだ。

「落ち葉読みましたか？」

隣から声を掛けられた。翔は顔を見上げた。そこには恵美がいた。

「読みましたよ」

翔が答えた。

「どうでしたか？」恵美は感想を聞いてきた。落ち葉って本は感じ
ることがたくさんあった。

愛しい人を2人も亡くして、どんな気持ちだったのだろうとか、男
の今後は希望を持って生きて行けるのだろうか。

自分が感じたままに伝えた。

恵美とも共感しあったり、感想を言い合った。

時間が過ぎていくうちに丁寧語は消えて、その他の本の事、お互いの事とかをいろいろ語り合った。

告白

翔にとって恵美と出会ってからの夏休みは有意義なものとなっていた。

毎日図書館にしか行っていないけど、恵美と毎日会える日々は翔にとって幸せと言えるものだろう。

恵美と毎日語り合っているうちに次第に恵美の事が好きになっていくのがわかった。

初めてこんな気持ちになったと感じた。

今まで女を異性としてみたことがなかった翔。

次第に翔は変わろうとしていた。

この日も翔は図書館に行った。

夏休みの終盤に差し掛かろうとしていたが暑さは相変わらずだった。汗をかきながらクーラーの聞いた図書館に入った。

イスに座っていた恵美に翔は話しかけ、少し雑談をした後、本を読み始めた。6時の閉館時間が来た時翔は言った。

「今日は送っていくよ。」

この言葉を言うのにどれだけ、苦労しただろう、緊張しただろう、達成感が翔を包み込んだ。

「え？大丈夫？」

「うん。」

「ありがと・・・」

スムーズに事が進んだ。翔の鼓動は高鳴りをあげ始めた。体が熱かった。これだけの言葉を伝えるのに。

図書館を出て少しCD屋によりたいと恵美は言い出した。

翔と歩きながらCD屋によって少し見た。図書館以外の場所に恵美と行くのは初めてだった。

CD屋を出て、二人で自転車を押しながら歩いた。

恵美の家までは少し距離があったが会話をしながら歩いてたらそんなのは気にならなかった。

恵美の家が見えてきた。空は暗くなり始めていた。

「恵美。」

翔の体がまた熱くなった。どうかなりそうだった。軽くめまいがする。

「恵美と出会って夏休みが楽しくなった。俺恵美が好きだ。」

言ってしまった。なんでこんな事言ってしまったんだろう。ドキドキと軽いめまいが辛かった。

「女子を異性と見たのは恵美が始めてでさ、初恋だと思う。」

俺、恋愛とか全然わかんないけど、もっと恵美と一緒にいたいと思っただよ。」

恵美は黙り込んでる。

「・・・ごめんね。もう遅いしね。もう家そこだから俺帰るよ。」
ようやく恵美は口を開いた。

「まってよ」

「・・・え？」

「私も翔が好きかも」

翔はなんていっていいかわかんなかった。少し黙り込んだ。
軽い沈黙が続いた。

そして軽く目を合わせた。

「明日も図書館来るよね？」
翔が言った。

「うん。」

日々

翔は今日、恵美と古賀美術館に行った。

恵美の友達、香坂さおりって女子からチケットをもらったらしくて翔を誘った。

美術館には絵画のほかにツボや皿などいろいろな骨董品があり、翔と恵美は閉館時間の6時まで見て、翔は恵美の家まで送ってった。

去年、高2の夏休みに翔と恵美は付き合い始めて、いろんなところへ出かけ、いろんな体験をし、恋愛を楽しんだ。

翔は恵美と付き合い始めて少しづつ変わり初め、今では結構活発的になっている。

今年、3年の夏休み、もうこれから先は受験やら進路指導で遊んでる暇はあまりなかった。

今日が最後の休日とも言える日に恵美と過ごした。

進路のことで頭がいっぱいだったが、恵美という時はそんな事は忘れていた。

翔は進学だが、恵美はどうなのだろう。よく進路の話はするけど、本格的な話はあまりしなかった。

夏休み最終日、恵美にタイムカプセルを埋めるから西岡公園に来てと言われた。

翔は、恵美への手紙と、思い出の本とスコップをもって西岡公園に行った。恵美はもう来ていた。

恵美はなんでタイムカプセルなんか言い出したんだろうと疑問に思ったが、気にしないで穴を掘った。

恵美は言った。

「大人になった時、お互いに別々の道を進んだとしてもこのタイムカプセルは開けようね。」

「たとえ一人でも空けてね。」

「ふたりであけるんだろ？」

「そうだね。」

そしてタイムカプセルを埋めた。

幸せから

夏休みも終わり、進学の勉強に集中をして、恵美と遊んでる暇もあまりなかった。

だから恵美の様子とかが上手く伺えなかった。

だが、翔はお互いに好き同士でいると確信していた。

秋、冬と続きクリスマスも恵美と過ごた。翔は恵美と出会えてホントによかったと思った。

今が一番幸せだと思った。

冬も終わって正月になろうとしていた。

「翔、話したい事があるの。」

「なに？」

「アメリカに行つて来る。」

「え？・・・」

戸惑いと同様を隠せない。

「なんで？」

「家の用事と夢かな。細かい理由は聞かないで。」

「・・・なんでだよ。」

翔は頭が真っ白になった。一番幸せと感じたクリスマス。月日ほとんど立っていないかった。

「なんでいつてくれなかったんだ。」

「翔、勉強で忙しかったし、同様させたくなかったんだ。」

「いつから決まってた？」

「少し前かな。」

「俺の事嫌いになったわけじゃない？」

「そんな事ないよ。」

恵美は翔にキスをした。

「絶対そんな事ない。」

「アメリカ行つても翔の事忘れないし、手紙も書く。」

「・・・わかったよ。恵美も夢をかなえてね。」

「うん。」

そうして正月も終わり卒業と同時に恵美はアメリカへ旅立った。

不安

翔は大学に進学をした。友達もでき、いい生活をおくれていると翔は思った。だけど恵美がいない。

恵美とは文通をする。恵美は今、アメリカの小説家になるための小さな専門学校に通ってるらしい。

恵美が翔と毎日図書館に通ってるのは本の勉強をするためでもあった。

文通は恵美を知る一番の方法だった。

もつと恵美と言葉を交わしたかった。しかし恵美は電話とメールを拒んだ。なんでだ。わかんない。

不安を翔は覚えた。アメリカに行く時のあのキスは嘘だったのか、恵美は俺のことが好きじゃなかったのか。

そんなるくでもないような束縛感、嫉妬感が翔をいっぱいにした。今大学には高校の時恵美と一番の親友、香坂さおりが近くにいる。近くというのは大学の同じ学科だし、友達付き合いと言う点では一番近くにいる。

香坂とは話も合うし、一緒にいて楽しいとも思えた。恵美がいない分少し、気持ちがあまざれたかもしれない。

恵美と文通は続いた。来る日も来る日も手紙を翔は書き続けた。しかし文通は途絶えた。

一ヶ月、二ヶ月と手紙を待っても手紙は一通も来ない。

翔はますます不安になった。

もう俺達は終わってしまうのか。そんな予感さえ漂わせていた。そしてその予感的中する。

「翔、恵美から連絡があつたよ。」

さおりから急に言われた。実に手紙が途絶えて半年が7ヶ月がたつ

ていた。

「はやく聞かせてくれよ。さおり。」

「恵美は、アメリカで出会った専門学校生と結婚したらいいよ。」

悲しみから

大学を卒業し、ある大きな本屋で本の管理者の仕事に就いた翔。

その職場では仕入れた本の管理や、通販売上の処理などをしていた。翔はなるべく多くの時間を本と過ごしたかったのだ。

高校時代も図書館で本を読み続け、大学でも数多くの本を読んだ。

進路に迷った翔だったが、翔は安定した職よりもやりたい仕事を優先してこの仕事を選んだのだ。

「さおり。この本、棚に並べておいてよ。」

「うんわかった。」

大学時代同じ学科だったさおりと同じ職場に入社した。

翔はこの本の管理職を務めるのを決めた時、さおりも一緒に入社しようと言ってきたのだ。

翔はさおりと大学3年の時から付き合い始めていた。

翔は大学時代、恵美の結婚をしり、ずっと落ち込んだ。

もとの高校時代の無愛想の翔に戻りつつあった。しかしこれを支えたのがさおりだった。

さおりは翔の事はずっと好きだった。だからさおりは翔の近くに入れて嬉しかったのだろう。

2年間、翔は恋愛はまったくしないで、普通の大学生活をおくっていた。しかし序所に翔はさおりに心を開いていった。

そして学科授業の職場訪問の時にさおりは翔に気持ちを伝えて、翔は承知した。

さおりと翔は序所に距離を詰めて今ではいい恋人同士になっている。

片隅

会社に入社して1年が立とうとしていた。

翔は黙々と仕事をこなし、安定した職で、この仕事には少しも不満を感じなかった。

恵まれた上司、本に囲まれた生活、想ってくれているさおり、翔は高校の時に恵美と感じた「幸せ」を取り戻そうとしていた。

「さおり、今日どつか食べに行くか。どこがいい？」

「え。どこでもいいよ。」

「じゃあ洋食にするか。」

「うん。」

「あつと、少し仕入れ管理の仕事があるから、少し、先帰ってて。終わったらメールするから、駅前集合ね。」

「うん。わかった。まってるね。」

こうしてさおりは姿を消した。

今店には誰もいない。翔は薄暗い店の中で仕入れた本の整理をしている。

新しいダンボールから本を取り出して、商品の確認をしようとした。そのときだった。

ダンボールに積まれていた本に「落ち葉」と書いてあった。翔は少し体が熱くなった。

なんだろう、軽く苦しいような、それでいて、懐かしさのあまり嬉しさを覚えるような、なんとも言えない気持ちに翔は包まれた。

店には誰もいない。

少し翔は仕入れ商品である「落ち葉」を取り出し、読み出した。そして、翔はさおりに食事の断りの電話を入れた。

落ち葉という本

〈落ち葉〉

秋は悲しみに包まれた。二人目の愛しい人が無くなった。

香織に続いて、祥子までも。秋は自分の運命を恨んだ。悲しんだ。

秋は生きてゆく自身、そして勇気が無くなった。これから先、また愛しい人が無くなったらどうしたらいいんだろう。

秋は2度目の自殺を図る事にした。密室の自分の部屋で首をつろうとする。

そして、ロープを天井にかけた。そのときだった。

「すいません。稲葉秋さん。お届け物です。」

誰だこんな時に。秋は不機嫌そうに届け物を受け、中身を空けた。

そこにはビデオテープが。なんだこれ。と思ったが、一度死ぬ前に見る事にした。

そこには最初に死んだ香織が。

「秋？これ見てるかな。これを見てるって事は私はもうこの世にはいないんだね。」

秋には言いたい事があるからさ内緒で病室からビデオ撮っちゃった私、がんなんだって。もう悪性で手遅れなんだって。しょうがないよねまったく。

でも私、生きてて後悔は一個もないな。でも後悔ではないけど心配事は秋の事かな。

私がいなくなったら秋はどんなに悲しむんだろうね。辛いんだろうね。

それを思うと凄く胸が苦しいよ。。だけど運命は変えられない。私は病氣と戦って死ぬ。

秋？これだけ最後に言わせて。私の分まで生きて。それと辛いかもしれないけど自分の運命と向き合って。」

そういつてビデオは切れた。秋は自殺はやめた。涙が止まらなかった。運命と向き合う決心をした。

「生死を受け止めるよ。香織。生きるよ。」

同窓会

暑い真夏に突入しようとしていた。しかし、店内はクーラが利いていて翔にとって暑さとは無縁だった。

同じような仕事が続く。なんとなくだらけ始めている。

「いらつしやいませ」

「あの、ここに桐原翔さんいませんか？」

「はいいますよ。」

「おゝい翔！お客様が呼びだぞ。」

なんだろうと思い、レジの所まで足を運んだ。すると懐かしい顔ぶれが並んでいた。

「懐かしいなおい！翔元気でやってたか？」

「まあまあかな。」

高校卒業してから連絡一つよこさないで何やってんだんだよ。」

「まあいろいろあつてな」

「相変わらず、口調がクールだな。それにしても懐かしい。」

なにが言いたいんだ。世間話は今度でいいだろ。仕事場まで来て、。

少し翔は真夏のせいかイライラしていた。

「何かようだったのか？」

「ああ、そうだったな。今度、同窓会が開く事になったんだよ。学校全体でな。」

だから懐かしい先生とか全員くるよ。結構大きな同窓会らしいんだな。お前音信不通だから、俺が連絡係でここまで来てやったよ。」

「同窓会か。懐かしいやつら見れるのか。」

「夏目先生何やってるかな」

「そうだな。」

「とりあえず。伝えたからな。曜日とか日にちはこの紙に・・・」

「じゃあ悪かったな。仕事場で。またな。」

同窓会か。高校生活が懐かしく感じた。みんな来るのか。

でもそんな事はどうでもよかった。翔は一点の想いしかなかった。

西岡公園

夏の終わりに近づいた。同窓会の日と、奇遇な事に仕事は休みだった。

同窓会会場の学校に行くのになんとなく電車で行った。電車は乗るのは久しぶりだった。

高校時代毎日乗ってた2駅の通学路。懐かしさを感じながら、電車に乗った。

途中の車内の窓から恵美と一緒に自転車を引いた道路、毎日通った図書館が見えた。

そして西岡公園には切なさ、懐かしさ、いろんな想いがこみ上げてきた。

学校につき、まずクラスで点呼を取った。ほとんどがみんな出席していた。

ほんとに懐かしい顔ぶればかりだ。あまり人と接してなかった翔もこのときばかりはいろんな人と会話を楽しんだ。

クラスでの雑談も終わったところで、今度は2次会会場のかなり大きな体育館ホールに移動した。

体育館に集まったのは同窓会に参加した全校生徒。だから人が多い。しかし、クラスは違っても、知ってる人は大勢いる。目が合えば、会話を楽しんだ。

翔は探した。目を凝らして探した。しかし、大きな体育館、かなりの人数、なかなか見つかるはずも無い。

恵美が同じ学校だったのは最初驚いたし、嬉しかったが校舎内で会ったりしたことは無かった。

翔は同窓会参加者の名簿表を見せてもらった。そこには恵美の前は無かった。

同窓会も終わりを迎えつつあった。3次会をやるとみんなが言った

が、明日は本の大切な作業や会議があつたのでやめといた。翔はなんとなく、恵美と歩いた道を歩いて帰ることにした。翔は少しがっかりした。なんでだろう。今はさおりという大切な人がいるのに、まだ恵美に未練があるのか。今日、会つたとしても何がしたかつたんだ。混乱と、自分に対する不自信、それに恵美が同窓会に来なかつた事に対するおかしな気持ち。一人ぼーっとアスファルトの暗い路地を歩いてると、西岡公園が目の前にあつた。

手紙

翔は西岡公園に入った。初めて恵美と会話したあのベンチはそのまま残っていた。

この公園ではほんとに恵美との思い出が詰まっていた。花火もした。日陰でキスもした。ケンカも少しした。

翔の中で思い出がよみがえる。涙が出てきた。辛いのか、悲しいのか、懐かしくて嬉しいのか、自分には何の涙かわからない。

しかしその少し暖かい涙は流れている。そして翔はタイムカプセルを埋めた事を思い出した。

翔は埋めた場所へ走っていった。変わらぬままだった。

目印といって、木の棒をさしたが、そのままになっていった。

翔は無我夢中で手で穴を掘り返した。必死だった。過去も現実も理想も苦悩も何もかも忘れて掘った。

掘り続けた。すると中からあの時埋めた箱が出てきた。

翔は取り出し、ふたを開けた。

密封してあつたせいか、まったく埋めた状態と変わらなかった。

そのまま残っていた恵美への手紙、思い出の本、「落ち葉」それから、翔への手紙が入っていた。恵美が入れていたのはそれだけだった。

翔は見るのが不安だった。

怖かった。それは予感ではなかった。なんとなく確信的な感が働いた。

これは読んではいけないような。しかし翔はこれを読まなきゃいけないと思った。

翔は昔、恵美の言葉を思い出した。

「大人になった時、お互い別々の道を進んだとしてもこのタイムカプセルは開けようね。」と。ふたりであけるはずだったタイムカプセル。

今翔は一人で明け、恵美から翔への手紙を読もうとしていた。そして封を開け、手紙を開いた。

翔への手紙

翔へ

こんにちは翔。元気にしてる？今日はこの手紙をタイムカプセルに入れるよ。

だけどこの手紙はとても大切な手紙。だからこの手紙を読む時は心して読んでね。

今私がどんな気持ちかわかる？私は翔を愛してるよ。ほんとに誰よりも。

ほんとの事を言うと、図書館で会う以前から好きだった。無口で、本ばっか読むけど、ずっと見てたんだよ。

頑張ってたあの時声を掛けたの。変な口実だったけどね。嬉しかったよ。この公園へ来てくれて。

私に翔が告白してくれた時は翔に飛びつきたかった。

翔。好きだよ。

ただね。もうお別れの時期が近づいたの。私ね、脳に障害が残ってたんだって。

知能、とか体の機能とかは、問題ないんだけど、一種の睡眠障害かな。

植物状態に陥るんだって。だから進学も就職もしないの。

これからはずっと病院生活。そして翔の夢を応援し続ける。大丈夫だよ。

翔は。私がいなくてもさおりがいる。彼女もね、ずっと翔が好きだったんだよ。

だからさおりが翔を支えてくれると思う。私の事はいいの。翔が幸せなら。だから翔は私の分まで幸せになってね。さようなら。翔。私の初恋の人。

一人

「いらつしやいませ」

翔の声が店内に響き渡る。

翔は仕入管理、商品情報の提供、などあらゆるジャンルの仕事をこなし、その功績がたたえられ、本屋の管理者になった。

それは本好きの翔にとって最高の出来事だろう。もう老人になっても本と一緒に暮らせるんだ。

しかし、翔はなにも嬉しくなかった。

まるで翔はあの時恵美からの手紙を読んで、感情が無くなった廃人のように。

あれから何年がたっただろう。翔はさおりと別れた。さおりが別れを伝えた。

さおりは翔が恵美の事について深く傷ついて、私の事なんか眼中に無い事を察したのだろう。

さおりは恵美から翔を頼まれたが、申し訳なさ半分と、翔が私を見てくれなくなった悲しさ半分の気持ちを持って翔を振った。

さおりは店をやめてどこかの子会社で働いているらしい。

翔は本当に抜け殻のようだった。恵美はアメリカには行っていない。今は病と闘いながら生活している。

恵美は俺に気を使って、アメリカ行きの嘘をつき、俺をさおりを結ばれるように仕向けた。

俺の幸せを願って。自分が苦しいのに最愛の人の幸せを願って。

翔は恵美を今でも愛していた。しかしこれは届かない思いだと翔は思っていた。

いまさら恵美と会う資格などないのではないか。恵美を裏切ってさおりとくつついた。

これは恵美が願って粗筋どおりに事が運んだ事。しかし翔は自分を悔やんだし、許せなかった。

翔はその後黙々と毎日、楽しみの無い生活を送り、月日は翔が恵美からの手紙を読んで5年がたち、翔は30になろうとしていた。

ある日店にかつての恋人、さおりが現れた。

「恵美に合わせてあげる。」

この言葉に翔は耳を傾け、顔を上げた。しかし、無言のまま。

「翔は十分悲しんだし、辛かっただろうね。恵美と会ってあげてよ。」

なにをいまさらと思った。しかし5年たった今でも恵美を思い続けていた。

会いたい。会って謝りたい。ずっと一人にさせてごめんと。辛い思いさせてごめんと。

「恵美に会いたい。」

再会

翔はさおりに、一場学院大学につれてこられた。病院は多くて、中は広々としていて病室がたくさんあった。

長く続く廊下を歩き続け、ついた先は他の部屋とは違って少し大きなトビラの部屋だった。

看護婦がノックをして、部屋に入った。すると翔の目から大粒の涙が。

「恵美・・・」

ベットの上には横たわった恵美の姿が。

翔は恵美の手を両手で握り、大きく泣いた。泣き声は病室を響き渡った。

恵美はちょうど翔との文通が途切れた時に意識をなくし、意識不明のある言い方をする「植物状態」だと言う。

医者話を聞いているときも翔は泣き続けた。

そしてその日から翔の店の管理は代理の副店長がすることになった。

翔は恵美に付きっ切りになった。

来る日も来る日も足を運んだ。そしてある日翔はぼんやりした暖かい日に包まれながら少し眠りについた。

2 度目の初恋

翔は夢を見た。凄く幼い少年時代。黄色い帽子をかぶり母親の手を握り幼稚園バスのバス停まで歩いてる風景。

駄菓子屋や、公園、郵便局や、翔が大好きな図書館もある。

バス停につき、バスを待った。そのバス停にいつも一人でいる女の子。

おとなしそうで、綺麗な顔をしている。翔は無口で友達がいなかった。人に喋りかけた事が無かった。

そんな性格だからその子には声を掛けられなかった。そしてバスが来て、翔はバスに乗る。

その女の子は別のバスを待っているようだ。そんな日が続いたある日、その子は消えた。翔は悲しんだ。

喋りたかった。何で喋りかけなかったんだろう。翔は一生分の後悔をこの幼稚期に使ったんだろうと思った。

そこで目が覚めた。

気がついたら日が照っていたばかりだった。天気は薄暗くオレンジ色に染まっていた。

ふと恵美を見た。

そうか、あの幼稚園の時の子は恵美だったんだ。確信は無い。

。しかしなんとなくわかるんだ。翔は恵美に2回初恋をしている。

翔は恵美を強く思った。喋りたい。幼稚期に使った後悔を思い出した。今度こそは喋りかける。恵美！！

すると恵美はうつすらと目を開けた。機械が音を立てている。

翔は恵美をずっと見ていた。

翔と恵美は見詰め合っていた。

「ただいま翔。ごめんね心配掛けて。翔の声聞こえてたよ。」

「恵美。俺は恵美に2回初恋をしてるんだ。その話聞いてくれる？」

（後書き）

読んでくれてありがとうございました。これから今の駄目なところを修正して、作品を書いていきたいと思っています。
応援よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7086a/>

タイムカプセル

2010年10月19日05時17分発行